

第2学年 音楽科学習指導案

日 時 平成29年9月26日（火）5校時
学 級 2年B組 男子17名 女子10名
計27名
場 所 音楽室
授業者 教諭 小野 千恵子

1. 題材名

歌詞と旋律・音色・強弱とのかかわりを感じ取り、声部の役割を生かして表現を工夫しよう

2. 題材について

本題材は、学習指導要領に示された指導事項のうち、第2学年及び第3学年の内容 A 表現(1)ア「歌詞の内容や曲想を感じ取り、曲にふさわしい表現を工夫して歌うこと」、ウ「声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、表現を工夫しながら合わせて歌うこと」共通事項(1)ア「音色、旋律、テクスチャ、強弱」について指導を行うものとする。歌詞の内容や曲想を味わい、思いや意図をもって曲にふわしい表現を工夫して歌う力を高めたり、それぞれの声部の役割や全体の響きとの関わりを理解し、主体的に歌ったりすることで、合唱の響きの豊かさを味わわせることにつなげたい。

今回、教材として取り上げた「名づけられた葉」（新川和江作詞/飯沼信義作曲）は混声三部合唱で、斉唱から混声三部合唱、異なる三つの旋律の対位的な組み合わせ、へ短調からの転調を経ての混声三部合唱から混声四部合唱と旋律の重なりが変化していくため、旋律の重なりの違いや曲想の変化を感じ取りやすく、声部の役割を生かして表現を工夫するのに適した教材といえる。

また、「名づけられた葉」という詩は、第1・2連で述べた事柄を根拠として、第3連で「わたし」の心情が語られる構成となっている。「ポプラの葉」は、それぞれの葉がいくら懸命に生きようと努力しても、みな同じ名でしか呼ばれない。それに比べ、「わたし」は「ポプラの葉」と同じ「いちまいの葉」「おさない葉っぱ」にすぎないけれど、「わたしだけの名」で呼ばれると、比喻表現を巧みに用いながら、「わたし」と「ポプラの葉」を対比させ、それぞれの共通点と相違点をとらえた上で、人間の生き方を考えさせる内容である。音楽的な場面転換もはっきりしており、第3連の「だからわたし考えなければならぬ」からの表現を考えさせることは、歌詞の内容と旋律とのつながり、歌詞の内容からの音の重なりによどのような響きの美しさがあるのかを味わうことができ、生徒自身の心情も踏まえながら、多様な表現方法の工夫を考えさせていくことができると考える。

3. 生徒の実態

生徒はこれまでの学習においては、1年生では声部の重なり方の特徴を感じ取り、声部の役割について学習し、役割にふさわしい歌い方を意識しながら歌ってきた。2年生では歌詞の内容と旋律、リズムや音の重なりによる曲想の変化を感じ取り、それにふさわしい表現の工夫について学習してきた。これらの学習を通して旋律の重なりを知覚し、曲の雰囲気味わいながら歌うことを楽しんで歌う生徒が増えている。しかし、表現するときに、思いは込めているが、それが相手に伝わる表現になるためにはどのように工夫したらよいかを十分に考える機会が少なく、生徒は指導された内容で表現することが多かった。そこで、歌詞と旋律・音色・強弱とのかかわりを感じ取りながら、音の重なりによって生じる響きの美しさを味わい、それぞれの特徴をとらえて、表現したい思いや意図が伝わるための表現方法の工夫を自分たちで考え、試行錯誤しながら表現ができるよう学習を深めていく。

4. 題材の目標

- (1) 「名づけられた葉」の歌詞の内容や曲想、声部の役割と全体の響き、旋律と音色、テクスチャ、強弱とのかかわりに関心を持ち、意欲的に主体的に歌唱表現に取り組む。
- (2) 「名づけられた葉」の旋律と音色、テクスチャ、強弱のかかわりを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、歌詞の内容や曲想を味わい、声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、どのように歌うかについて思いや意図をもって音楽表現を工夫する。
- (3) 「名づけられた葉」の歌詞の内容や曲想、声部の役割と全体の響き、旋律と音色、テクスチャ、強弱とのかかわりを生かした曲にふさわしい音楽表現をするために、必要な技術を身に付けて歌う。

5. 題材の評価規準

ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽表現の創意工夫	ウ 表現の技能
「名づけられた葉」の歌詞の内容や曲想、声部の役割と全体の響き、旋律と音色、テクスチャ、強弱とのかかわりに関心を持ち、意欲的に主体的に歌唱表現に取り組もうとしている。	「名づけられた葉」の旋律と音色、テクスチャ、強弱のかかわりを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じ、歌詞の内容や曲想を味わい、声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	「名づけられた葉」の歌詞の内容や曲想、声部の役割と全体の響き、旋律と音色、テクスチャ、強弱とのかかわりを生かした曲にふさわしい音楽表現をするために、必要な技術を身に付けて歌っている。

6. 題材の指導計画（5時間扱い）

	学 習 活 動	評価規準
第1時	<ul style="list-style-type: none"> ・「名づけられた葉」を聴き、歌詞の内容と曲想について感じ取ったことを書き、発表し合い、互いの思いに触れる。 ・パート練習を行い、音程とリズムに気をつけて歌う。 	ア
第2時	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のパートの役割を確認する。 ・全体でパートの役割を理解し、合唱する。 	イ
第3時	<ul style="list-style-type: none"> ・「名づけられた葉」を4つの場面（A～D）に分け、それぞれの場面ごとの特徴的な要素を知覚・感受し、それらについて書く。 ・A～Cまでをどのように歌えばよいかを考え、それを踏まえてA～Cの歌い方を工夫する。 	ア イ
第4時 （本時）	<ul style="list-style-type: none"> ・Dの部分の特徴的な要素を知覚・感受したことを基に、どのように表現を工夫するかを考える。 ・考えたことを基に、パートで歌い方を工夫する。 	イ
第5時	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の内容や曲想を味わい、声部の役割と全体の響きとのかかわりを生かした曲にふさわしい音楽表現を追求する。 ・録音した歌声から、よさや改善点を聴き取り、感じたことを書き、話し合い、合唱をまとめる。 	ウ

7. 本時の指導

（1）本時の目標

歌詞と旋律の動き、声部の役割や全体の響きを感じ取り、それらを生かして表現の工夫をする。

（2）本研究とのかかわり

本時は本校研究における言語活動の柱3「生徒同士（ペア、グループワークなどの活動）で、自分自身の考えを持ってかかわりあい、交流しながら表現する活動」を中心に取り入れて指導する。

本題材では「歌詞と旋律・音色・強弱とのかかわりを感じ取り、声部の役割を生かした表現の工夫」を目指し、特に「聴き」「感じ」「考える」という学習過程の場面に重きを置いて進めていく。「聴き」「感じ」の場面では、声部の重なり方に注目させ、音や実際の歌唱から聴いて判断したり、比較聴取を取り入れたり、さらには楽譜からも視覚的に気づかせたりしながら、旋律の重なり的美しさなどを味わうようにしていく。その際、音楽を形づくっている要素について、言葉や音、音楽で共有したりしていく。「考える」の場面では、以上のことを基にして、各声部がどのような役割を果たすことで、曲にふさわしい表現ができるかを考えていく。

自分自身の考えを持って、他の考えを共有しながら、生徒相互の思考が深まるように指導する。

(3) 本時の評価規準

評価の観点	評価規準	評価の方法
音楽表現の創意工夫	歌詞と旋律の動き、声部の役割や全体の響きを感じ取って、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	・生徒の発言内容 ・学習プリント

(4) 本時の展開

	学習活動	○指導上の留意点 ●評価
導入 10分	1. 「名づけられた葉」を合唱する。 2. 本時の学習課題の確認	○前時までの学習を振り返りながら、本時の課題につなげられるようにする。 ○Dの部分で重点になる場所を確認し、その部分を考えることを伝える。
展開 30分	<p style="text-align: center;">旋律や音の重なりを感じ取って、 Dの部分の女声「だから～」男声「名づけられた～」の表現を工夫しよう。</p> <p>3. ソプラノとアルト「だから～」男声「名づけられた～」旋律や音の重なり方がどうなっているか確かめる。歌詞と旋律に分けて考える。</p> <p>①どの旋律がリードするとよいか考える。 〈発言例〉主旋律は男声</p> <p>②各旋律はどのように歌うとよいか考える。 〈発言例〉 女声→・広がっていく感じ ・主旋律を引き立たせるように歌う 男声→・力強い感じ・堂々と歌う</p> <p>③「考えなければならない」のユニゾンの効果を考える。 〈発言例〉 ・より言葉を伝えるため・丁寧に歌う ・次を引き立たせるため</p> <p>4. 考えたことを基に練習する。</p>	○「だから～」「名づけられた～」の旋律や音の重なりを生かした表現の工夫がどのようにできるか考えさせる。 ○旋律を交換して歌って、考えさせる。 ●歌詞と旋律の動き、声部の役割や全体の響きを感じ取って、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。 ○その場でパートで歌う場面と全員で歌う場面で効果を確かめる。
	終末 10分	5. まとめの合唱 6. 自己評価 7. 次時の確認